

子どもの文化からおとなの

文化へ 上 笹一郎

わたしの家では、毎年三月の中旬から四月の中旬くらいにかけて、春の草を摘みに郊外へ出かける。山村生まれで、幼い頃にワラビやゼンマイを採りなれて育ったわたしに、都会育ちで野山を珍らしく感ずるらしい妻が同調して、長女の美々が幼稚園にかよひ出す時分から、美々への自然という意味も含めて、郊外へ出かけるようになったのだ。

六、七年前までは、東京西郊の稲田堤―すなわち多摩川の中流地域に出かければ、ミツバやセリやヨメナ、すこし山へ入ればタラの木の芽なども採ることができた。けれど、ちょうどその頃からスピードを上げ出した近郊都市化の波は、万葉以来の多摩の横山を削り、たんぼをつぶし、きれいだつた小川を濁り川に変えて春の草摘みなど

できないようにしてしまった。以前と同じように草摘みのできるのは、おそらく、まだ都市化の波及していない奥武蔵の山峡だけだろうと思われる。

ところが、そんななかで比較的たくさん春の草のあるのが、横浜市と町田市にまたがっている八こどもの国Vである。わたしは、この八こどもの国Vの造園をした風変わりな技師を友人に持っていたためもあって、毎春ここをおとずれるのだが、去年の春は、母校でもある文化学院の男女の学生一〇人ばかりを連れて行った。そして、タンポポやノビルやフキノトウなどをたくさん採ったのだけれど、このときおどろいたのは、第一に、学生たちの大半が食用になる春の草をほかの草と識別できなかったことであり、第二に、春の草を識別できた学

生たちにして、それらの草がどうしてタンポポと呼ばれツクシと名づけられているのかわからないという事実であった。

周知のようにミツバもタンポポもツクシも、今日では歴とした標準語として日常生活で使われており、どんな国語辞典にも載っているが、しかしこれらは、もとはといえば子どもたちが遊びのあいだから作り出したことばなのである。近代以前の日本の村落生活においては、畑に栽培する野菜などはほとんどなく、野菜とは文字どおり野の菜のことであって、それを採取する仕事は子どもにも要請された。そこで日本の子どもたちは、幾百年という長いあいだ、春ごとに野の草を摘みに出ていたわけだが、しかし夢の間にも遊びを忘れない子どもたちは、摘みつつある春の草でさまざまに楽しみ、その結果がおのづからにしてミツバとかタンポポとかツクシとかいった名前を生み出したのである。

いますこし詳しく記してみるなら、ミツバは漢字で書けば「三つ葉」であり、特有の芳香ある円形の小葉が三枚あつまって一

本の莖について、それがいかにも特徴的なところから名づけたものにちがいない。タンポポは、民俗学者の柳田国男翁がその鋭い詩人的感覚によって推定したところによれば、春に先がけて路傍にあざやかな黄色を点ずるあの花の形が、糸できちんと締めた鼓に似かよっているからだという。つまり、大鼓と小鼓を交互に打つとタン・ポポ、タン・ポポ……と聞こえるが、その音から子どもたちは鼓をタンポポと呼ぶようになり、さらに転じて、鼓に似た春の路傍の黄色い花をもタンポポと呼びならわすようになったというのだ。そしてツクシの名は、子どもたちがいくつもあるあの茶色の袴のところから莖をはずし、はずした莖をふたたび袴におさめて、「どこ継いだ——？」と問うて遊んだことから始まっている。

このほかにも例を挙げていくと際限がないが、いづれにせよ、現在わたしたちが成人の文化と認め、標準文化と観じて疑わなもののなかには、仔細に見れば、子どもの遊び・子どもの文化からはじまったもの

が少なからず含まれているのである。それでは、子どもの遊びや子どもの文化が成人の文化・標準文化に練り入れられて行くその道筋はどうなのかといえ、そこには、母親という存在が大きくそびえ立っているようにわたしたちには思われてならない。

一夫一婦制の婚姻・家庭生活方式がスタートしてから現在まで、育児という仕事を完全に社会化し得たことはないため、わたしたちは主として母親によって子どもたちを育てて来たわけだが、そのため母親は、子どもの意思を権力者としての男性に伝える伝達者であった。そしてこの母親が、わが子を中心として子ども一般への愛情を抱き、子どもたちの口にする片言隻語にも心を留め、それをあたたかなまなざしで見守り、自分たちも進んでその片言隻語を使ったり、自分たちの文化にまでなつたところから、ツクシやタンポポなどという子どものことばが成人の文化にまでなつたのである。

いま、母親の問題はしばらく措くとして、子どもに関することだけに限れば、おとなの文化・標準文化のなかにこんなにも

子どもの遊びや文化から成長したものがあ
る以上、子どもの遊びや文化、ひいては子
どもの全生活史を究明することは、それだ
け日本文化に新たな照明をあてることにほ
かならないと言えるであろう。しかし残念
なことに、教育史——わけても教育制度史
に取り組む人は多く、また児童文学の創造
・研究にたずさわる人は大勢あっても、草
の根の子どものささやかな文化に心を寄
せ、その文化史的意味をさぐるうとする人
はほとんどいないのだ。

わたしがこの文章を綴っている今は一九
七一年の一月だから、これが活字になつて
出る頃は、もう、東京近郊の野山には、ミ
ツバだのヨメナだのノビルだのがさわやか
に萌え出ているにちがいない。昨年、学生
たちといっしょに八こどもの国Vへ行った
ときにも、わたしは、タンポポやツクシの
名が子どもの発想から起つたことを話した
のだが、さて、今年も例年のごとく春の草
摘みに出るとすれば、はたして東京近郊の
どこへ行ったものだろうか。